

Journey to my PhD@York in イギリス Vol.2

浅野 貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

今年の5月から8月にかけて、京都に滞在しながら博士論文のためのフィールドワークを実施していたのですが、調査にご協力頂いた方などから、「どうして留学をしようと思ったのですか？」という質問を受けることが度々ありました。今回は、その質問にお答えするような形で、私の思いを綴りたいと思います。



Clifford Tower:

ヨーク市内の中心部に位置する。タワーの上からは市内が一望でき、ヨーク観光には外せない人気スポット。

留学をしようと思ったきっかけ

前号で触れましたが、留学する以前は、対人援助職の養成及び継続研修等を実施する民間機関である、京都国際社会福祉センター（以下、KISWEC）に勤務していました。留学をしようと思ったきっかけとして第一に挙げられるのは、このKISWECでの経験です。

KISWECには、海外研修・交流事業の一環として、社会福祉分野での博士号(PhD)の取得をサポートする制度があります。KISWECの元スタッフで、この制度を利用してアメリカやイギリス等の大学院で博士号(PhD)を取得した後、日本の大学で教員をしている方が数名います。そうした方の留学経験を直に聞き、様々な刺激を受けたことが、留学を考える大きなきっかけになりました。正直なところ、それまでは自分の将来のキャリアパスの選択肢として、留学を考えたことは全くありませんでした。

またKISWECでは、スイスから招聘した講師が研修を担当したり（※現在は在籍していません）、海外研修・交流事業として、京都市内のメンバーになっている社会福祉施設から、

毎年2名をスイスへ3ヶ月間派遣する事業を実施しています。そうした環境にいたおかげで、少しずつ海外を身近に考えるようになったように思います。

次に、今後、研究に携わっていく上で、博士号の取得が必須になるであろうことを考えた時に、日本の大学院の博士課程に進むのか、それとも海外の大学院に留学をするのかという2つの選択肢がありました。KISWECの研修事業を通して、多くの研究者と接する機会があったこともあり、前者を選んだ場合の大まかなキャリアパスは予想することができました。つまり、KISWECで働きながら、大学院の博士課程に進み、論文や学会発表等の業績を積みながら、大学の教員のポジションを目指すというルートです。

そして、前述の通り、留学をしてみたいという気持ちはあったものの、いざ実現させようと思うと、現実的にクリアしなければならないことが色々とありました。英語の問題はもちろんですが、結婚や第一子の誕生という大きなライフイベントがあり、家族のことを考えると、留学をあきらめざるを得ないかという思いは、幾度となくよぎりました。しかし一方では、そうしたことを理由にしてあきらめたら、後悔し続けるだろうという思いもありました。

そのような中、どちらの選択肢を選ぶべきかについて迷っていた際に、留学するという決断を後押ししたのは、聖書にある「狭い門からはいれ」（マタイによる福音書7章13,14節）という言葉でした。私はクリスチャンではありませんが、何となくこの言葉が心に残っていました。現実的なことを考えると、

「広い門」を選んだ方がきっと無難だろうが、留学という険しく苦勞が多いであろう「狭い門」に思い切って進んだ方が、長いスパンで見たときには、きっと得られるものは多いだろうと信じて、最終的に留学を決断しました。その決断に至るまでには、家族はもちろんのこと、様々な方々のサポートがありました。

留学を決断してからは、英語圏の大学・大学院に留学する際には必須となるTOEFLという、英語能力の判定テストの対策のために、大阪にある予備校に通ったり、留学についての様々な情報を集めるなどの具体的な準備をしながら、留学に備えました。

アメリカへの留学



Gateway Arch:

セントルイスのシンボル。1962年に完成し、その高さは約192mあり、頂上部分には展望台がある。

留学先については、早い段階からアメリカ、またはカナダを目指すことは決めていました。その理由のひとつとして、日本の社会

福祉分野において、海外に留学して修士号(Master)や博士号(PhD)を取得し(※博士号の取得者数は非常に少ないですが)、日本の大学で教員をしている研究者の多くが、アメリカに留学していることが挙げられます。そうした研究者の書籍や論文等を通して、ソーシャルワークの理論や調査方法等を学んでいたの、アメリカかカナダの教育システムの中でソーシャルワークを学び直したいと思いました。

さらに、特にアメリカの大学は、奨学金(scholarship)のシステムが充実していることが、もうひとつの理由として挙げられます。これは、例えば、日本育英会の奨学金のような貸与型(loan)ではなく、給付型であるため返済義務はありません。実際に、私が留学したワシントン大学(Washington University in St. Louis)から、この給付型の奨学金を得ていたため、経済的には非常に助かりました。また、私の同期の留学生の中にも、同様の奨学金を得て留学している人が少なからずいました。アメリカの大学(特に私立大学)の授業料は驚く程の高さですが、様々な形で奨学金を付与し、経済的にサポートするシステムがあることが、世界中から多様な学生が集まってくる理由のひとつだと思います。

また、私はKISWECに就職する以前に、日本の大学院で社会福祉の修士号を得ていたのですが、留学にあたり、最終的な目標である博士号の取得に向けて、修士課程を経て博士課程に進学するのか、それとも直接博士課程に進学するかの2つの選択肢がありました。先述の通り、KISWECの元スタッフで、アメリカやイギリスに留学した方々の経験を聞いたり、その他にも色々と調べた結果、直接博士

課程に進学するルートは非常に難しいことが分かったため、修士課程でsecond masterを取得した後、博士課程に進学するルートを選びました。

現在、イギリスのヨーク大学(University of York)の博士課程に在籍している立場として、自分の選択は間違っていなかったと実感しています。分野にもよるので一概には言えませんが、何より英語の問題が一番大きく、それに関連して、英語圏のアカデミックなルールや慣習に慣れるのは容易なことではありません。私にとって、修士課程の2年間(※アメリカのソーシャルワーク分野の場合)というのは、そうしたことにadjustするには必要な期間でした。ワシントン大学の同期の留学生の中にも、同様の選択をして、博士課程に進学している人たちが何人もいます。逆に、ヨーク大学で、英語圏の大学の修士課程を経ずに、直接博士課程に進学して、色々と苦勞している留学生の同僚もいます。



Brookings Hall :

ワシントン大学の正門。1904年に、セントルイスで開催された万国博覧会で使われた建物が移設された。

アメリカからイギリスへ

上述のように、アメリカでMSW(Master of Social Work)を取得した後、博士課程に進学するためにイギリスに移ったのですが、「なぜ、アメリカではなく、イギリスの大学を選んだのか?」という質問を、イギリスに来た時によく受けました。この質問の背景には、その逆のケース、つまりイギリスからアメリカという選択はあっても、私のようなケースは非常に珍しいということがあります。

日本の大学でも博士課程の場合は同様だと思いますが、修士課程と違い、博士課程に進学する際は、ある程度明確にされた研究テーマと研究方法について、指導教授(supervisor)が興味を持ち、指導をしてもいいとしないと学生として受け入れてはもらえません。ある意味では、お見合いのような側面があると言えます。そのため、まず、アメリカ及びカナダの大学のホームページで公開されている情報を元に、自分の研究テーマと近い研究をしている研究者を調べました。しかし、ソーシャルワーク分野で似たような研究をしている研究者はあまりいなかったため、イギリスとオーストラリアにも範囲を拡げて調べました。その結果、自分の興味と近い研究をしている研究者を見つけることができたので、メールでコンタクトをとったところ、そのうちの何人かの研究者が、私の研究に興味を示してくれました。その中でも、現在、私がヨーク大学で指導を受けているIan Shaw先生

(<http://www.york.ac.uk/spsw/staff/ian-shaw/>)

は、最も早く返事下さり、進学を熱心に勧めて下さいました。そのことがイギリス、そしてヨーク大学を進学先として選択した最も大きな理由です。

さらに、アメリカとは違った環境に身を置いて、ソーシャルワークを研究したいと思ったことも、イギリスを選んだ理由として挙げられます。海外で暮らす中で、強く実感することなのですが、ある物事を考える際に、違った文脈から考えてみて、その比較を通して、よりそのことの特質が見えてくるということがあります。そして、その比較する文脈がより多様な方が、様々な側面からそのことを捉えるchanceが生まれます。その意味で、ソーシャルワークについて研究する上で、アメリカだけではなく、イギリスの文脈も比較対象とすることを通して、より多様な視点を得られるのではと思い、イギリスで研究をするを選びました。

おわりに

この第14号が刊行される頃は、すでにイギリスに戻っています。留学して以降、長期で日本に滞在したのは約5年ぶりだったのですが、今回の滞在の中で、留学前と変わらない風景を別の視点から捉えている自分に気付くことが度々ありました。今後の連載を通して、そうしたことも取り上げていきたいと思っています。